2016 NAVI

競技者育成プログラム　2016 年度指針

We are the next-generation athletes aiming at victory in international competitions.

NAVI（国際大会での勝利を目指す、次の世代の競技者！）

2020 東京オリンピックを目指して

公益社団法人　日本フェンシング協会

指導者・競技者　育成委員会

1. 競技者育成プログラムとは

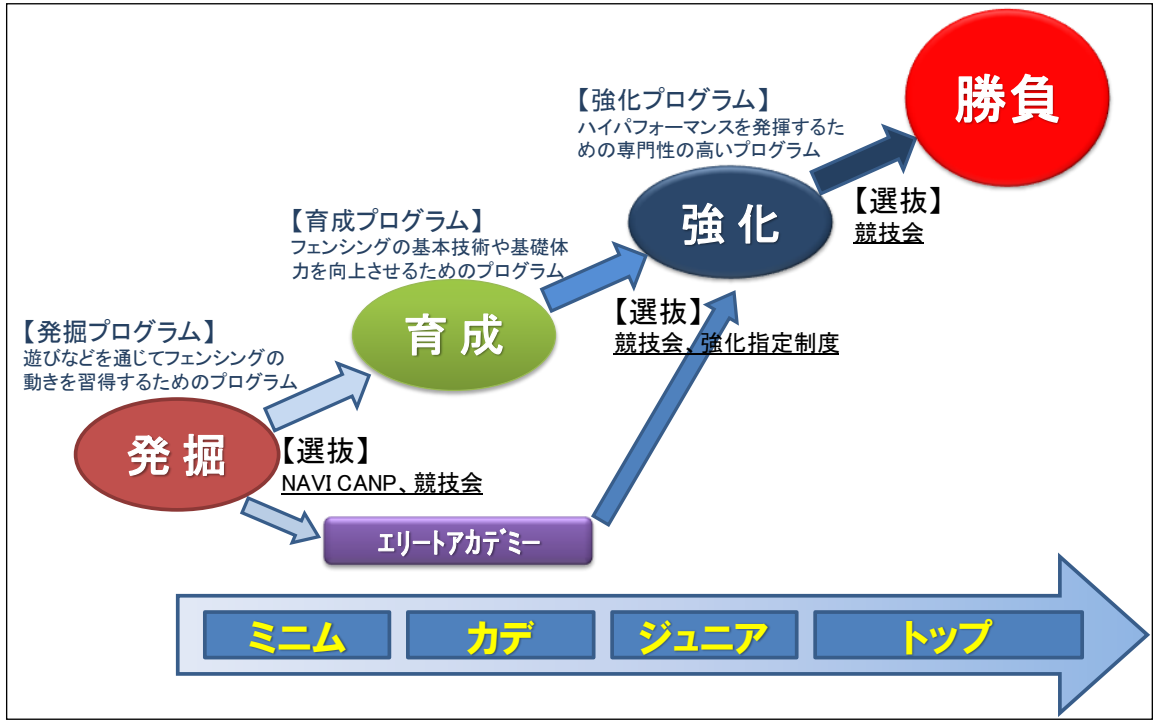
オリンピックや世界選手権をはじめとする国際競技会において好成績を修めるためには、一貫した指導システムを構築し、継続的で安定した競技力の向上を図っていかなければなりません。

ここでいう一貫指導システムとは、競技開始からトップになるまで、一人の競技者を同じ指導者が指導するというものではなく、「優れた素質を持つ競技者が、指導者や活動拠点の違いにかかわらず、一貫した指導理念に基づいて、個人の特性や発達段階に応じた適切な指導を受けることにより、トップレベルの競技者に到達するための発掘・育成・強化システム」です。

2003 年から進めてきた競技者育成プログラムは、一定の成果を修めてきましたが、情報の共有化が進んだことや競技レベルが高度になったことなどにより、いくつかの改善が必要となってきています。2015 年度は「指導者の育成」と継続的な「育成事業」をテーマに推進していきます。

この 2015 競技者育成プログラムは、我が国フェンシング界の関係者や関係支部等が一体となって、これらを実現していくための指針となります。

発掘・育成・強化のイメージ図（図１）



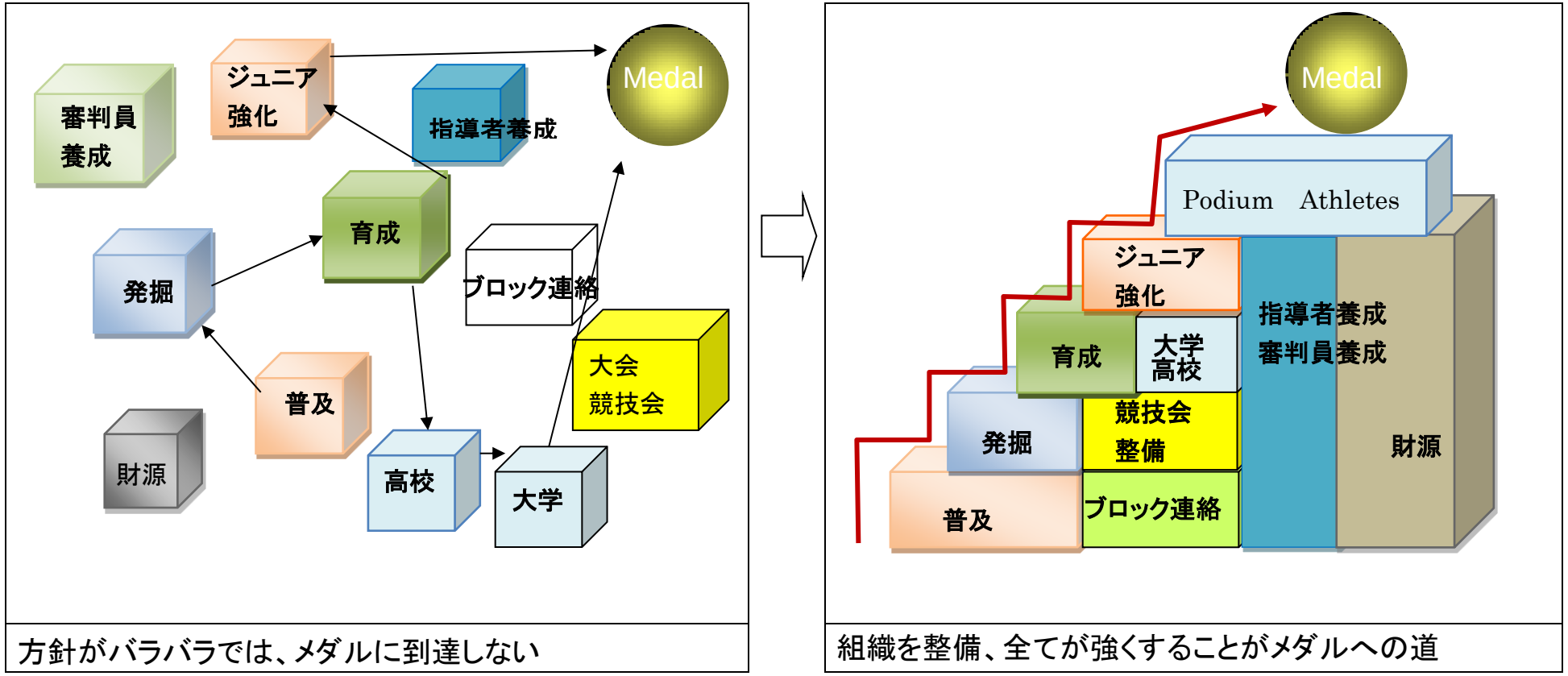
2. 組織の在り方

この目標を達成していくためには、優れた素質を有する競技者の発掘や育成はもちろんですが、指導者のさらなるレベルアップ、競技の普及、大会・競技会の整備、財源の確保など、様々な課題を共有し、取り組んでいかなければなりません。

2006 年より、中学生、高校生といった競技会の年代区分を、カデ、ジュニアといった世界に対応した年齢区分の競技会とすることを促進してきました。もちろん、学校教育におけるスポーツを否定するものではありませんが、競技者の発達・成長段階を把握し、指導にあたるとともに、各競技会の役割や目的を認識して競技会を運営することが必要です。

情報の共有、指導者、審判員のレベルアップ、財源の確保など多くの課題がありますが、2016 年度も引き続き、育成事業の課題の一つとして、取り組んでまいります。

体制の構築イメージ（図 2）



方針がバラバラでは、メダルに到達しない

組織を整備、全てが強くすることがメダルへの道

2. 競技人口

1）登録者数の推移

7 年間で約 1200 名近くの登録者が増加しています。各世代とも増加しています。様々な要因がありますが、オリンピックのメダル獲得の好影響は、小学生について大きいようです。

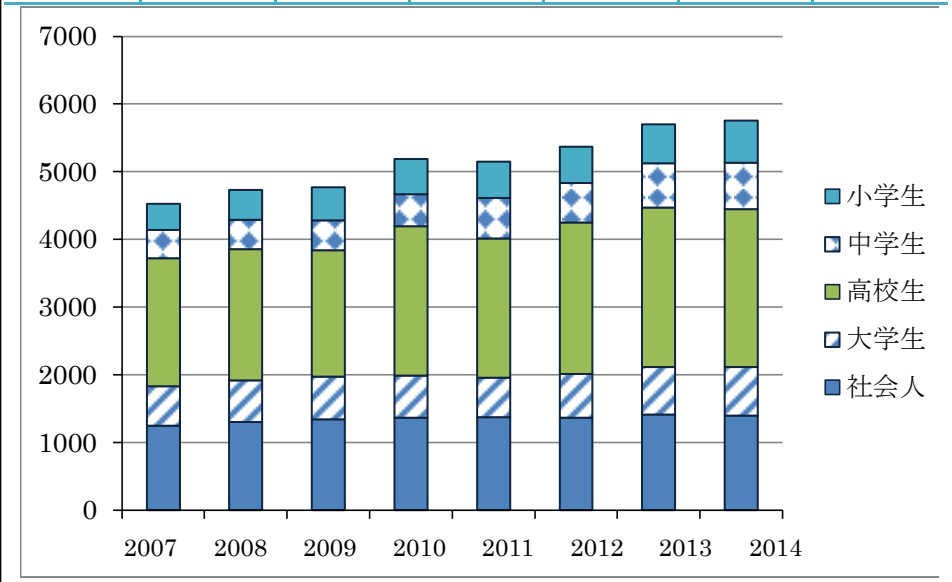
一方、表を見ますと、“高校で開始する選手が多く、高校でやめる選手が多い”ことが窺えます。また、大学卒業とともに、競技を続ける環境を確保することが難しいことも窺えます。

競技者育成システムを構築していくためには、このような状況を鑑み、始めるタイミング、継続できる環境づくりが必要となります。

競技人口の増加は、新たな指導員の供給の源でもあります。

登録人口の推移（表１）

年度	社会人	大学生	高校生	中学生	小学生	合計
2007	1251	582	1887	421	384	4525
2008	1302	613	1938	440	437	4730
2009	1345	630	1868	435	491	4769
2010	1365	623	2206	471	523	5188
2011	1371	584	2058	597	542	5152
2012	1363	646	2238	590	536	5373
2013	1409	705	2360	650	575	5699
2014	1396	722	2330	682	626	5756
2015	1228	771	2311	682	558	5550



2）開始

フェンシングに興味を持った少年たちが競技を開始し、継続していくためには、「練習ができる場所と教える人」が必要です。フェンシングクラブの充実・新設、指導員の増加等の環境整備が必要です。

具体的な施策⇒指導員教育、会場施設借用支援

3）継続

進学、卒業、就職等によって、競技の継続をやむなく断念するケースがあります。継続するためには、出場できる、出場したい大会があること、練習できる環境、継続のための指導者が必要です。

⇒国内大会の整備、クラブチームの設立支援

4）復活　生涯スポーツとしての取組み

フェンシング競技は生涯を通して、取り組むことが可能なスポーツです。学校を卒業後、一旦、競技を離れたとしても、戻ってこられる環境を整備します。

多くの競技者が、長い間、競技に取り組んでいくことによって、指導者が増え、これによって、開始する人も増えます。

3. OLYMPIC におけるメダル

1964 年の東京オリンピックでは、男子フルーレ団体 4 位という成績を修めました。この実績を機に、長い間、男子フルーレを中心とした強化が続けられてきました。オリンピックへの出場も、1968 メキシコ、1972 ミュンヘン〈男子団体 6 位〉は男子フルーレのみの参加でした。1964 東京オリンピック以降、女子選手が参加したのは 1976 年のモントリオールオリンピックからであり、男子エペ、男子サーブルの参加は 1992 年のバルセロナオリンピックからでした。

東京オリンピックの「成功体験」により、フルーレ中心の強化は一定の成果を修めてきたものの、「成功体験」からの脱却ができなかったことや“アジアの選手ではエペ・サーブルは勝てない。”といった考え方が、エペやサーブルの進化を阻害してきたとも言えます。

日本がこのような状況にある中、中国、韓国はフルーレ以外の種目にも強化を図り、オリンピックや世界選手権で男女 3 種目でのメダルを獲得するようになってきています。

1964 年東京オリンピック以降の参加状況（表 2）

オリンピック		日本男子の参加種目						日本女子の参加種目						五輪ﾒﾀﾞﾙ	
年	開催地	フルーレ		エペ		サーブル		フルーレ		エペ		サーブル		中国	韓国
	（I 個人 T 団体）	I	T	I	T	I	T	I	T	I	T	I	T	12	9
1964	東京	○	④	○	○	○	○	○	○						
1968	メキシコ	○	○												
1972	ミュンヘン	○	⑥												
1976	モントリオール	○	○					○	○						
1980	モスクワ〈不参加〉	○	○					○	○						
1984	ロスアンジェルス	○	○					○	⑧	実施せず				1	
1988	ソウル	○	○					○	○						
1992	バルセロナ	○		○		○		○						1	
1996	アトランタ	○								○	○				
2000	シドニー	○				○		○						2	2
2004	アテネ	○				○		○		○		○		3	
2008	北京	②		○		○		⑦		○		○		2	1
2012	ロンドン	○	②					⑦⑧	⑦	○		○		3	6

※女子種目の導入により、2004 年から個人戦 6 種目と、団体戦 4 種目が行われるようになった。④⑥②⑦⑧はメダル獲得及び入賞

4. 世界ジュニア･カデの実績

日本では、都道府県支部においてもフルーレ中心に競技活動が行われる傾向があり、種目の適性よりもまずはフルーレから始めることが一般的です。指導者（コーチ）も、一部を除き、ほとんどがフルーレ種目を専門とするコーチです。

世界ジュニア・カデ選手権の過去 10 年において、男子フルーレでは 3 つの優勝を含み個人・団体で 8 個のメダル獲得、女子フルーレでは、2 個のメダルを獲得しています。

数年前から、サーブル、エペ種目をエリートアカデミー事業に取り入れ、全国カデエペ選手権やサーブルチャレンジカップなどの競技会を創設し、全国少年大会の中学生の部にエペ、サーブルを導入するなど、エペ、サーブルの育成・強化に取り組んできた結果、徐々に競技力も向上し、2014 年の世界ジュニア・カデ選手権において、男子エペ個人で優勝、女子サーブル個人で銅メダルを獲得するまでになってきました。全国的にもエペ・サーブルの競技力の向上は顕著なものがあります。

アジアはもちろんのこと、日本選手でもエペやサーブルでも勝てないことはないという認識が広がってきたことは確かです。

世界ジュニア・カデ選手権における最高位とメダル獲得＆入賞成績（表 3）

	男子									女子									
種目	フルーレ			エペ			サーブル			フルーレ			エペ			サーブル			
年代	カデ	ジュニア		カデ	ジュニア		カデ	ジュニア		カデ	ジュニア		カデ	ジュニア		カデ	ジュニア		
	個人	個人	団体	個人	個人	団体	個人	個人	団体	個人	個人	団体	個人	個人	団体	個人	個人	団体	
2005	22	【3】	【3】	39	53	8	38	60	19	24	57	15	79	63	21	43	40	15	
2006	6	11	8	37	49	21	39	36	16	【2】･7	22	9	54	54	18	37	32	14	
2007	【1】	17	8	69	69	29	48	31	17	8	6	10	40	30	18	34	32	12	
2008	7	【1】	10	【3】	71	16	41	48	18	12	34	12	40	54	21	14	45	16	
2009	18	23	8	45	74	25	44	42	15	30	6	5	33	63	21	41	51	17	
2010	28	12	11	54	21	16	57	23	17	20	40	14	63	16	15	43	32	14	
2011	不参加																		
2012	【1】【3】	14	10	45	35	24	62	41	23	11	41	8	16	17	14	43	35	12	団体
2013	【3】･5	16	12	79	12	13	44	53	22	22	12	10	30	37	13	19	51	18	カデ
2014	17	【3】	4	20	【1】	8	47	45	23	8	【3】	6	15	28	23	【3】･7	27	15	MIX
2015	6･7	17	5	26	13	10	21	8	8	22	5	7	27	41	19	【3】	8	9	【2】
2016	6	【1】【3】	【1】	35	6	10	57	【3】	7	【2】	9	8	38	24	14	7	14	7	7

数字は日本選手の最高順位をあら【　】内はメダル獲得

5. 種目別の育成システム

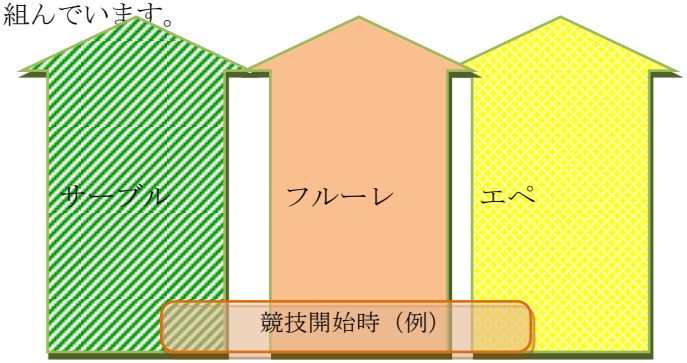
フェンシングには、3 つの種目がありますが、それぞれの特性があり、ピーク年齢も異なります、指導者はその競技者の種目別適性を見極め、適切な種目を選択させ、発達年齢、最大ピーク年齢などを考慮し、最大能力を引きだすことが求められます。

選手育成のイメージ〈図3〉

強豪国の選手育成

強豪国でもフルーレ、エペ、サーブルを兼務する選手もいるが、トップ選手に関しては高度な専門性が求められるため、兼務はあり得ませえん。

トップ選手のみならず、多くの選手が小さいころから専門的に取り組んでいます。



専門種目選択時期のイメージ図

- クラブチーム主体であり、クラブが専門化している。
- コーチが専門化している
- 選手は、最初からまたは数年で専門種目を選択している。

フルーレの現状と育成・協会事業指針

① フルーレ種目については、地方にも優秀なコーチがおり、これに続く選手も育っています。

② 反面、ジュニア〈20 歳未満〉やカデ〈17 歳未満〉で活躍しながらも、シニアの選手になると失速してしまう選手もいます。原因はいくつか考えられますが、ミニム、カデと恵まれた指導を受けてきた選手が、高いステージに上がる段階において必要とされる自己管理能力やモチベーションが不足していたり、高いレベルにおける指導者不足等が原因のひとつと考えられます。また、海外遠征などに多額の経費を必要とし、経済的な理由で競技の継続を断念する場合もあります。
⇒資金調達は大きな課題

③ 世界で勝つためには、カデ、ジュニア世代から、国際大会での経験を積む必要があります。国内で勝てても世界で通用するとは限りません。素質のある選手が、恵まれた環境で、十分な練習相手とコーチを得て、しっかりと準備した者のみがメダルに到達できる資格をもつと言えるのではないかと思います。

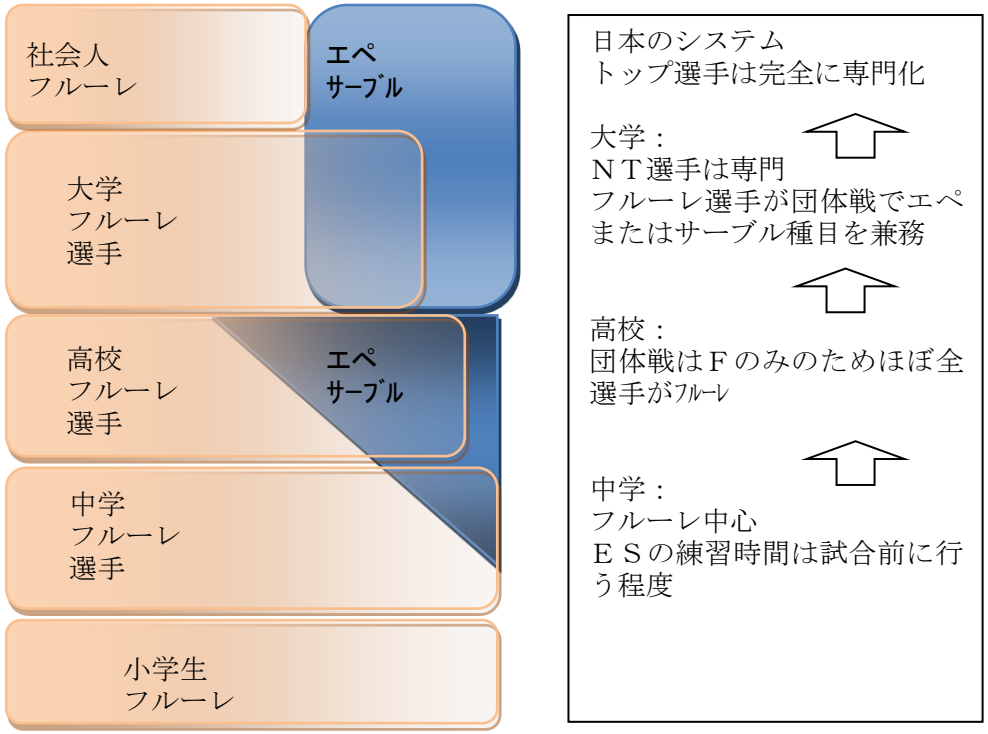
④ 2016NAVI　（ミニム＆ブロック＆U20 キャンプ）
フルーレについては、ミニムキャンプを継続するとともに、海外キャンプを実施します。さらに各ブロックでは、指導者スキルアップを図ります。これまでの中央キャンプ、U18 キャンプを発展的に解消し、2016 年度より U20 キャンプ〈国内・海外〉とします。対象の年齢幅を拡大し、競技会等の成績と種目担当コーチや委員会の推薦等により、育成選手を少数選抜し、より継続的に高密度の育成・強化を図ります。

エペ･サーブルの現状

我が国のエペ･サーブルの専門選手

① フェンシング開始時：ほとんどの選手がフルーレから始める。
② 中学時：フルーレとエペを兼務する選手が増える。
③ 高校時：僅かの選手がサーブル、エペを専門的に取り組むが、インターハイ等でフルーレ団体戦が行われるため、個人の適性よりもチームの事情を優先し、フルーレを選択したり、兼務したりする傾向がある。優れた素質を持つ選手ほど兼務を余儀なくされ、完全専門選手は少ない。
④ 大学時：専門化は進むが、選手数の少ない大学では団体戦のために兼務する選手がいることもある。
⑤ 社会人になると日本代表などのトップ選手は、ようやく完全専門化する。

従来の種目選択のイメージ〈図 4〉



エペとサーブルの育成･強化事業指針

① 2003 年からの競技者育成システムの構築により、若年選手の発掘や育成、地方支部の情報も中央の理事会、強化委員会が概ね把握できるようになってきています。このような状況の中、2016 年度の課題として、エペ･サーブルの育成システムの再構築と育成･強化があります。
② これまでは、一部の選手を除き、フルーレと兼務しエペやサーブルに取り組んでいるというのが実情でした。また、エペ･サーブルについて十分な実績と経験を持つコーチも極めて少ない状況です。フルーレも十分とは言えませんが、エペ･サーブルについては世界と戦う選手を育てるには、あまりにも脆弱な環境です。
③ これまでの中央キャンプで、エペ、サーブルのキャンプを実施してきましたが、1 年に1～2回のキャンプでは、選手のスキルアップを図るには十分ではありません。一貫指導システムを機能させるためには、所属コーチ〈支部〉も含めたスキルアップに継続的に取り組む必要があります。
④ 2016NAVI　（ブロック＆U20 キャンプ）
ブロックキャンプでは、**競技者＋指導コーチの参加**によって、指導者･競技者双方のレベルアップを図っていくことを目的に実施します。
これまでの中央キャンプを発展的に解消し、U20 キャンプ〈国内・海外〉とします。対象の年齢幅を拡大し、競技会等の成績と種目担当コーチや委員会の推薦等により、育成選手を少数選抜し、より継続的に高密度の育成・強化を図ります。

6. 育成システムのイメージ

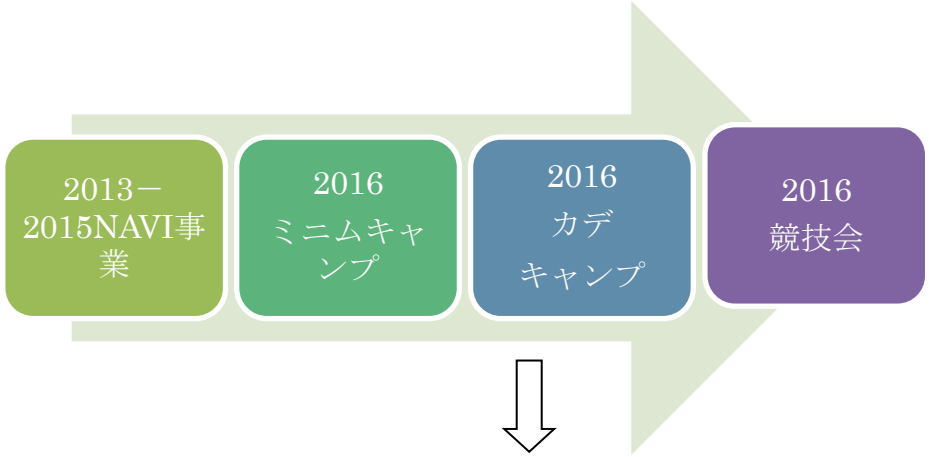
〈図 5〉

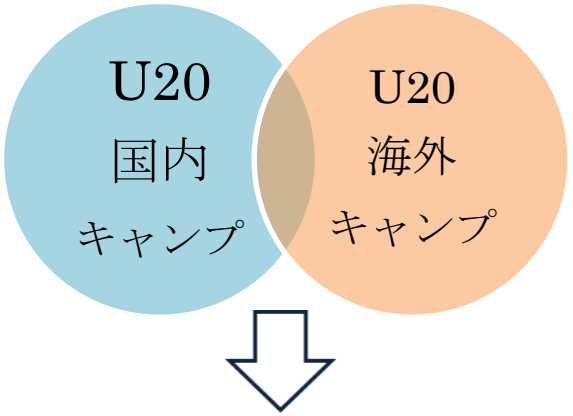
年代				発掘・育成・強化のイメージ	2016 の重点課題
国内区分	学年	年齢	国際大会		
社会人		25	シニア	Podium 日本代表 ユニバ代表	
		24			
		23			
大学生	4年	22			
	3年	21			
	2年	20		ジュニア強化	
	1年	19	ジュニア		【指導者（コーチ）のスキルアップ】
高校生	3年	18		エリート アカデミー	NAVI-カデ（ブロック）キャンプ フルーレ　ブロックキャンプ 2 回 エペ　ブロックキャンプ 2 回 サーブル　ブロックキャンプ 2 回 競技者＋ブロック指導員（コーチ） （育成）
	2年	17		TC 事業	
	1年	16	カデ	NAVI－U20 キャンプ 国内・各種目 4 回 海外・各種目 3 回 （育成・強化）	
中学生	3年	15			
	2年	14			
	1年	13		NAVI-ミニムキャンプ（発掘・育成）	
小学生	6年	12			
	5年	11			
	4年	10		支部によるスポーツ教室等 普　及	
	3年	9			
	2年	8			
	1年	7			

7. 2016年度 NAVI 事業と重点課題

事業予定表（表4）

		2015 年度	2016 年度											2017 年度	
種目		3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月
ミニム キャンプ	フルーレ															
	（エペ）゜					小 5～中 1										
	（サーブル）						地域 T									
	海外															
カ デ キャンプ	3 種目															
								ブロック 4 回								
U18 国内キャンプ 海外キャンプ	フルーレ															
		ｱｼﾞｱ JC	世界 JC											ｱｼﾞｱ JC	世界 JC	
	エペ															
		ｱｼﾞｱ JC	世界 JC											ｱｼﾞｱ JC	世界 JC	
	サーブル															
		ｱｼﾞｱ JC	世界 JC											ｱｼﾞｱ JC	世界 JC	

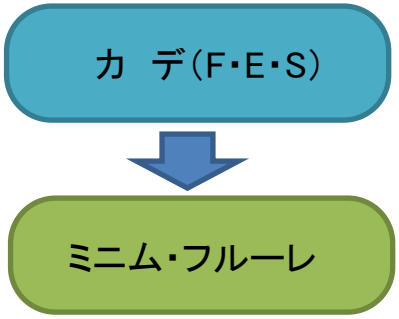
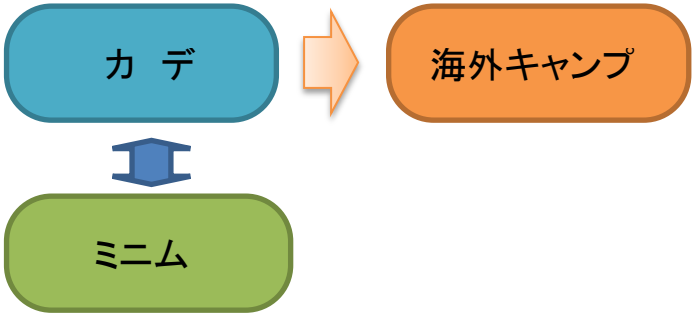
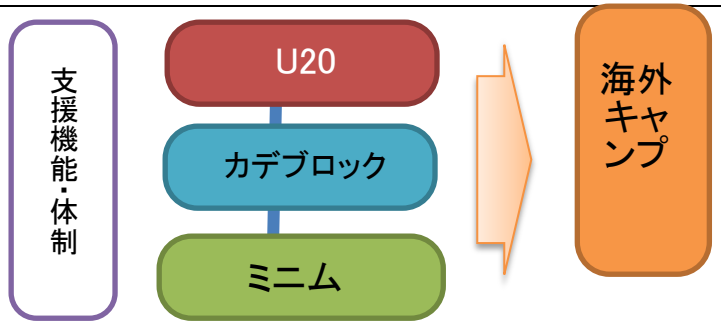




重点課題　指導者＆競技者スキルのレベルアップ

継続的育成･強化事業

8. 育成方針の変遷

段　階	イメージ	主たる方針とエポック	育成関連事業
第1ステージ 2003～2008年度		□全国に情報ネットワークを構築する（情報共有） □カデ層を対象として実技指導 ・技術指導、栄養指導、 ・ルール、審判技術　等々	□2006年 世界基準に合わせたカデ・ジュニア競技会の推奨
第2ステージ 2009～2012年度		□ミニムキャンプの開始 競技開始の低年齢化に対応し、小学５年生からのミニムキャンプを開始 □日本代表選手も講師に □継続的エペキャンプの実施 地方在住のエペ指導者が協力し、エペ選手を育成	□２００９年 エリートアカデミー事業への参画 □2011 年 中学生選手権にエペ・サーブル種目導入
第3ステージ 2013～2014年度		□エペ・サーブル種目の充実を図る □海外キャンプを開始 外国人選手との交流と国際経験を積むことを重視し、ホースティにも取組む TAP 事業:2020 ターゲットエイジ発掘育成プロジェクト（タレント発掘育成コンソーシアム）	□２０１４年 TAP 事業 （MS・WE）
第5ステージ 2015年度～		□中央キャンプからU18キャンプへの再編⇒育成機会の拡大 □2016 年度から育成競技者の継続性を高めるために年齢範囲を延長しU20 に拡大 TC 事業:タレント発掘育成コンソーシアム	□2015 年 ＴＣ事業（MS・WE） □小学生大会にエペ・サーブル種目 □エリートアカデミー事業の再編

9. 活動実績

【これまでの主な活動】

● 2002 年(平成 14 年度)
・全国担当者会議、開催 ····· 競技者育成プログラムの方向性の検討
・ ブロック会議開催 ····· ブロック内での意見調整等
・海外の育成システム調査 ····· フランス、ドイツ
・指導指針作成

● 2003 年(平成 15 年度)
・全国担当者会議 ····· ブロック研修会実施に向けた検討
・ブロック研修会 ····· 9ブロックで開催(約 300 名参加)
・有望競技者の海外派遣 ····· ドイツ

● 2004 年(平成16年度)
・ブロック研修会 ····· 9ブロック開催(約 400 名参加)
・中央研修会 ····· 茨城県で開催(19 名参加)

● 2005 年(平成17年度)
・ブロック研修会 ····· 7ブロック開催(約 250 名参加)
・中央研修会 ····· JISSで2回開催(延 43 名参加)
・DVD作成 ····· 「フェンシングウォーミングアップ＆エクササイズ」

● 2006 年(平成 18 年度)
・ブロック研修会 ····· 7ブロック開催(約 250 名参加)
・中央研修会 ····· JISSで開催(23 名参加)
・DVD作成 ····· 「世界のトップクラスのフェンシング(高円宮杯より)」
・福岡県タレント発掘事業との連携

●2007年(平成 19 年度)
・ブロック研修会 ····· 8ブロック開催(約 200 名参加)
・中央研修会 ····· JISSで開催(20 名参加)
・福岡県タレント発掘事業との連携

● 2008 年(平成 20 年度)
・ブロック研修会 ····· 8ブロック開催(約 150 名参加)
・中央研修会 ····· JISSで2回開催(延 43 名参加)
・エペ研修会 ····· 長野県箕輪町で開催
・DVD作成 ····· 「フェンサー、指導者のための外傷・障害対策」
・福岡県タレント発掘事業との連携

■ 2009 年(平成 21 年度) 略称を NAVI とする
・NAVI ブロック研修会 ····· 8ブロック開催(約 300 名参加)
・NAVI 中央研修会 ····· JISSで2回開催(延 50 名参加)
・エペ研修会 ····· 長野県箕輪町で開催
・NAVI ミニム・キャンプ ····· JISSで 3 回開催(約100名参加)

■ 2010 年(平成 22 年度)～2012年度(平成 24年度)
・NAVI ブロックキャンプ ····· 8ブロック開催(約 300 名参加)
・NAVI 中央キャンプ ····· JISSで 3 種目各2回～4 回開催
・NAVI ミニムキャンプ ····· JISSで 3 回開催(約100名参加)

◆ 2013年(平成 25 年度)
・NAVI ブロックキャンプ ····· 8 ブロック開催
・NAVI 中央キャンプ ····· JISSで 3 種目各2回～4 回開催
・NAVI ミニムキャンプ ····· JISSで4回開催(約100名参加)
・海外キャンプの実施

◆ 2014 年度〈平成 26 年度〉
・NAVI ブロックキャンプ ····· 7 ブロック開催
・NAVI 中央キャンプ ····· JISSで 3 種目各2回～4 回開催
・NAVI ミニムキャンプ ····· JISSで 3 回開催(約100名参加)
・海外キャンプの実施
(※TAP 事業では、カデ MS/WE の国内外キャンプ 15 回実施)

◇ 2015 年度〈平成 27 年度〉
・NAVI ブロックキャンプ ····· 種目別に開催
・NAVI U18 キャンプ ·····種目別に開催 JISS他 2 回～4 回開催
・NAVI ミニムキャンプ ·····千葉で 3 回開催(約120名参加)
・海外キャンプの実施
(※TC 事業では、カデ MS/WE の国内外キャンプ 16 回実施)

10. 発育・発達段階の応じた一貫指導の指標

	訓練段階	ステージ	年齢	目　標	指導のねらい	技術・戦術		体力	目標とする大会	
									国内大会	国際大会・研修
強化	専門の深化	6	20歳～21歳	世界で活躍したい （世界への挑戦）	スピードとパワー 国際経験 練習→試合→休養のサイクル	個性の発揮	・技術のパワーとスピードを追求する ・自分の個性を活かし、世界レベルの技術や戦術を追求する	パワーづくり	全日本選手権 学生選手権	（オリンピック）出場 世界選手権出場 アジア選手権メダル獲得 ユニバーシアードメダル獲得
		5	18歳～19歳	トップクラスになりたい （目標への挑戦）	専門的体力の強化 独自のスタイルの確立 自己理解とコントロール	応用能力の開発	・自分の個性（特徴）を理解し、それに合った技術や戦術を工夫する		JOCカップ インターハイ	世界ジュニア選手権メダル獲得 ワールドカップ出場 ジュニアWCメダル獲得
		4	16歳～17歳	フェンシングが強くなりたい （種目特化）	戦術の理解 総合的体力の強化 心の強さ 体の強さ		・状況に応じた技術や戦術を使うことができる ・個性と適性を理解し、専門種目に特化する		JOCカップ インターハイ	世界ジュニア選手権出場 世界カデ選手権メダル獲得 アジアジュニア・カデ優勝 ジュニアWC出場
育成	専門化初期	3	14歳～15歳	試合で勝てるようになりたい （自覚）	技術の理解 試合のやりとり、変化 基礎の見直し、修正	基本の習得	・試合規則を理解する。 ・戦術の基礎を習得する。	スタミナづくり	全国少年大会 JOCカップ	世界カデ選手権出場 アジアカデ選手権 国外研修
		2	12歳～13歳	フェンシングが上手くなりたい （向上心）	手と足のコーディネーション バランス感覚 フェンシングの楽しさ		・フェンシングの基本的な技術や移動動作を習得する。 ・間合いの感覚を理解し、戦術に結び付ける		全国少年大会 ブロック別少年大会 JOCカッ	国外研修 海外キャンプの経験 海外大会の経験
	基礎トレーニング期	1	11～12歳	フェンシングに親しむ （親しむ・感覚）	基礎的な感覚 剣の感覚 フェンシングの動き リズム感 スポーツの楽しさ	模　倣	・基礎を身につける ・個性を見つける ・自由な発想を誘導する ・闘争心を養う	動きづくり	全国少年大会	外国選手との交流 （国内外）
発掘	導入期	0	～10歳	フェンシングを始める （自由に動く）	フェンシングとの出会い フェンシングの楽しさ スポーツの楽しさ 友達づくり	遊び	・遊びや自由な動きの中から、体の動かし方や感覚を習得する ・間合いの感覚を磨く ・剣の操作（指の使い方） ・無理のない構え ・様々な足の動きなど	感覚 感性	各支部の大会	

公益社団法人日本フェンシング協会　指導者・競技者育成委員会